荒木山通信

2018年12月
第4号
荒木山の古墳を顕彰する会

北房の古代が熱い！

「北房地域で、最も住みたい場所は？」と聞かれたら「英賀廃寺が在った台地」と答えたい。

西は呰部の街区、東は水田の八幡町辺りまで一望でき、その空間を陽光と風がゆったりと流れている。

白鳳時代、此処に一丁（約一〇九ｍ）四方の寺域を持つお寺が建てられた。英賀郡を治める首長（豪族）の氏寺である。

一九七九（昭和五四）年、圃場整備の計画があることから緊急調査がなされ、金堂、講堂、塔、門や回廊などの配置が推定された。

中でも塔の基壇は、一辺が一五・六ｍあり、私寺としては全国的に見ても大きく、五重の塔以上の建物の存在が推定された。

この時代は、大谷・定古墳群が築造されていた時期に近く、地方の豪族たちが古墳の築造を止め、寺院を創建するようになる。

英賀廃寺は、備中北部で唯一の古代寺院であり、この地を領した首長の権勢が偲ばれる。

さて、この台地は、現在野菜生産団地となり、幾多のハウスが建ち並び、往時を偲ぶよすがは無い。ただ、塔の跡に「大雄山圓福寺々址」の石碑がひっそりと立っている。

最先端技術で東塚のナゾに挑む！

第一回測量調査

この測量調査は、本会の真庭市への要望に応えて市教委が主催した北房公民館講座「まに大付属ふるさと研究所」事業の一環として行われました。

講師は、同志社大学の津村宏臣准教授（市政策アドバイザー）と同大スタッフ、市教委の森俊弘参事、そして仕掛け人でもある新谷俊典主幹の先生方で、ふるさとづくりの強力な講師集団です。

全七回講座（五月開講～来年一月閉講予定）の第六回目に当たり、十一月二五日（日）～三〇日（金）の六日間連続の測量調査でした。

会員はもとより広く参加者が集い、行政と住民、大学との協働による官民学の取り組みで、六日間で延べ約一二〇名の情熱が荒木山東塚古墳に注がれました。

活動は、測量、探査、ドローン、３Ｄ模型製作の四班に分かれ、全員一度は体験できるように設定されました。測量班の最先端技術は三次元測量です。ぐるぐる回るレーザースキャナーを片手に古墳を行ったり来たりしてデーターを集め、墳丘の形を三次元立体として表示します。探査班ではソリに積んだレーダー装置を転がして埋蔵物の反応を探る地中探査。何本もの電極棒を一列に地表に刺して内部構造を確認する電気探査、磁力発信装置の付いたＨ型の金属棒を持って地底物を探る磁気探査等々、全てが最新の技術でした。

〔レーダー探査〕

ドローン操作による地表撮影は、ゲーム気分で楽しめ、三次元スキャナーを経て３Ｄプリンターで造り出される勾玉などの遺物のレプリカづくり体験も非常に魅力的でした。

高価な装置を操作する手に緊張が走ります。貴重な経験は講座生の意欲を高め、意識を変えます。体験的参加型学習の強みです。調査データーの分析は、次なる学習課題です。ナゾ解きは続きます。

本会では、眠っているふるさとの文化遺産を調べて眠りを解き、守り育てる方策を考え、次世代に継承する営みを目指しています。過去を知り、現代をより輝かせ、未来に繋げる仕組みづくりです。第二回の調査は次年度で西塚古墳の予定です。

（奥田）

〔３Ｄプリンター〕

古代吉備南部の古墳を訪ねて

去る一〇月一四日（日）、荒木山古墳を顕彰する会の役員五名が古代吉備南部の古墳についての研修をしました。総社市埋蔵文化財学習の館 館長 平井典子先生に案内して頂き、三輪丘陵の宮山墳丘墓と展望台・三笠山古墳（いずれも県指定史跡）や作山古墳（国指定史跡）、江崎古墳（県指定史跡）を訪ねて回りました。

宮山墳丘墓からは、奈良の箸墓古墳等から出土したものと同様の文様をもつ特殊器台が出土しています。三輪丘陵には多数の円墳や方墳が築かれており、集団墓地の一角にあることを考えると、宮山墳丘墓は弥生最後の墳丘墓と考えてよいのではと伺いました。

また、作山古墳は、ご存じのように県下第二位、全国では第十位の巨大な前方後円墳です。その墳丘に立つとまざまざと古代の吉備の力を感じるものでした。

江崎古墳は、吉備最後の前方後円墳の一つで六世紀後半の築造と考えられています。玄室内の家型石棺には人骨や金環・ガラス小玉等が残っていました。

平井先生に分かりやすく説明して頂きながらの実地見学で、普段はなかなか訪れることのできない古墳を訪ねることができました。参加した我々にとって非常に有意義な研修の一時となりました。（畦田）

〔江崎古墳の玄室と石棺〕

英賀郡と郡衙（役所）

荒木山の古墳を顕彰する会

代表 久松 秀雄

大宝律令施行（七〇二年）の頃には吉備の分国が成り、北房地域は備中国英賀郡に属した。英賀郡には、中井・呰部・水田・刑部・田治部・林の六郷があった。現在の真庭市北房地域、新見市大佐町、旧新見市の高梁川以東（豊永台地を含む）の一部、それに高梁市中井町に比定される。

当時、国には国衙（こくが）が置かれ、国司は中央から派遣された。郡には郡衙（家）と呼ばれる役所が置かれ、郡司はその地域の有力首長が任命された。

英賀郡の郡衙（推定地）は、上水田小殿に在る郡神社の参道あたりを中心に存在したとされている。

一九七九（昭和五四）年、布目瓦の発見により緊急調査がなされた。その結果、方形で大型の掘立柱の掘方を検出、南北棟の建物が英賀廃寺と同じ方位であり、瓦も同類であることから、双方の一体性が想定され、共に白鳳期の建立とされた。また、陶硯が出土し、郡衙と推定された。

郡衙の重要な任務の一つは、領域内の産物を収納することで、多くの正倉（稲穀等の倉庫）が必要であった。

参考に久米郡衙（宮尾遺跡）を覗いてみる。遺跡は中国自動車道建設に伴い発掘調査がなされた。谷を埋めるなどして造成された東西約三〇〇m、南北約一五〇mの南向きの段丘上に、二〇棟余の掘立柱建物群が発見され、溝、柵と組み合わされて計画的に造営されていたが、その建物は言わば庁舎棟で、内一棟が正倉であり、倉庫群は発掘区域外に在ると推定された。

〔郡神社の参道〕

さて、英賀郡衙の推定地一帯は、日照時間が短いことから「陰地（おんじ）」と呼ばれ、また谷水による湿気が多い土地柄であり、乾燥が求められる正倉の場所としてはいささか難があり、面積的にも手狭と思われる。

そこで、英賀廃寺の調査報告書にある次の一文に注目したい。

「谷尻遺跡は大規模な複合遺跡であり、その一角に英賀廃寺が建立されている。この段丘上では広い範囲にわたり瓦が散乱しており、寺院以外にも官衙遺跡が存在することも予想され、高倉、城の内、大門、的場などの小字名もその可能性を一層強くしている。」

この広大な段丘は、盆地を見下ろす景勝の地で、日当たりも風通しも良く、正倉に最適な地であり、その可能性が考えられる。

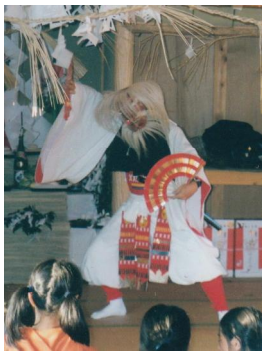
神話と古代史

荒木山の古墳を顕彰する会

顧問　戸村　彰孝

トントントン、神輿の先ぶれの太鼓が響くころ―私の少年時代―稲刈りの終わった部落のあちこちで備中神楽が催されていた。小神楽や十三年目の大神楽と呼ばれていた。

当屋の奥の間には注連縄が張られ、音頭取りの太夫さんが太鼓を敲いて神楽太夫の舞を盛り上げている。トントコトン―トントン。やさしい白面の大国さま、鼻の長いひょうきんな猿田彦、いかめしい髭面の素戔嗚尊が登場して、勇壮な舞やトンチのやりとりで、夜の時を忘れて老若男女の観衆を湧かせた。



郡神社の秋の大祭では、拝殿に黄金色の冠を戴き、右手に神楽鈴をチリン・チリンと鳴らし、左手に扇をかざして優雅に浦安舞を奉納する舞衣装の乙女の姿が忘れられない。

出雲の神々は、少なくとも七、八十年前までは少年たちの身近な存在だったのである。今、古代を探るために再登場を促そうと思う。

大国主命は少彦名命と協力して出雲の国づくりを進めた偉大な祖神である。一方、三～四世紀ごろのヤマト王国にとっては、朝鮮半島との交易や鉄資源を握る出雲は合従連衡に欠かせない国であった。三輪山に祀る大物主神、国譲りの代償ともいわれる杵築（出雲）大社がヤマトと出雲の関係をよく表しているのではなかろうか。

日本書紀・古事記には、大国主命の別名が大穴牟遅神・大物主神・大己貴神など十神あげられている。この多くの別名は、出雲各地の地方神を統合して古事記が大国主命としたといわれる。

北房の地でも大国主命が三谷の国司神社・中津井の金刀比羅神社。大物主神が五名の八幡さま・上水田の藤森神社。大穴牟遅神・大己貴神が宮地の天神さま・境の国司神社に祀られている。更に、四十五の小社には素戔嗚尊が祭神として鎮座されている。

神話は記紀や風土記、神楽を通して現存し、神社の祭神として崇敬される。考古学や民俗学の発展は、古代吉備・出雲の関係をより鮮明に画き出してくれるだろう。

〔金刀比羅神社〕

荒木山を訪ねて（その四）

南北からの登坂路を上がると、二基の古墳の中央へ立つことになります。そこで西を見ると見事な円丘が目に入ります。高さ六ｍの西塚の後円部です。

西塚は、東塚に続いて四世紀に築かれています。

東塚は、前方部が細長く先端が「バチ形」に開くのに比し、西塚の前方部は、幅広で短く先端に向けて台形に開く「柄鏡形」をしていて東塚に比し新しい形です。

西塚の前方部南側の一部は、地山まで掘り取られており、かつて畑として利用されていたようです。

後円部の直径は三九ｍのほぼ正円で、高さは前述のとおり六ｍもあり、三段築成との見方もあります。

後円部の頂上は、直径一六ｍの平坦面が在り、中心より少し南によった位置に主軸に平行して造られた埋葬施設がありますが、すでに盗掘されています。埋葬施設の全長は四・五ｍ、巾は〇・九ｍで、天井石が外され土砂が落ち込んで凹地となっています。

〔西塚の後円部〕（東側から）

この埋葬施設の外に、深い場所にさらに長大な埋葬施設が埋まっているとの見方もあります。

荒木山には、前方後方墳と前方後円墳というランクの異なる古墳が近接して築かれており、築造時期があまり開かないのに、なぜランクが上がったのかとの疑問もささやかれています。

「荒木山を訪ねて」は、今回で終わります。あなたも是非荒木山を訪ねて下さい。

月の輪古墳見学

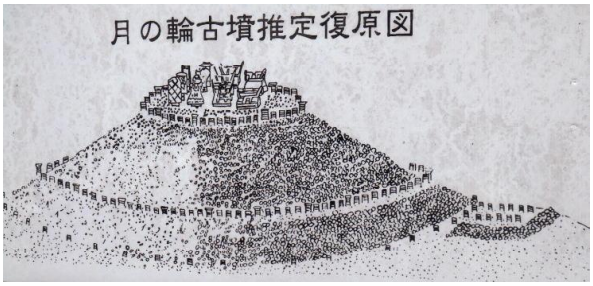
天野光暉

ようやく念願が叶った。それは六十数年前、大きく新聞紙上に取り上げられた「月の輪古墳」である。

もはや忘れかけていたが、荒木山古墳に関わるようになってから急に行って見たくなった。近くの古墳は多少は見学して回ったが、あの月の輪古墳だけはチャンスに恵まれていなかった。

今年二月、妻と二人で目的地久米郡美咲町飯岡へ弁当持ちで出掛けた。

平地から二七〇mの山の高所、車を現地駐車場へ置いた。二人だけのようだ。一〇〇mも歩くと雄大な古墳が目前に見え、素晴らしいの一言である。見晴らしが良く、美作、備前、そして眼下の大地を見ながら座して弁当を食していた。その時人の気配がし振り向くとびっくり、何と真庭市教委、考古学専門の新谷俊典さんが登って来た。此処は久し振りとのこと。私に取っては渡りに船。逐一説明をして頂いた。



墳頂中央部に六mと四mの木棺粘土槨※と呼ばれる埋葬施設が。被葬者はこの地方の豪族とか。辺りに家型埴輪や円筒埴輪など多数あったこと。

また、墳頂周辺と段や墳裾部にその数八〇〇本以上の形象埴輪が並べてあったことなど教えて頂き現場を確認した。書物によると、墳底径六〇m、高さ一〇m、頂上平坦部径一七mの大型円墳。斜面は、全て頭部大の角のある葺石、推定八万個に覆われているらしい。感動しながら見たり触ったりもした。

この古墳の発掘調査は、一九五三年から約一年掛けて、岡大の近藤義郎助教授(当時)と村内外の住民、考古学者、小・中・高生など延べ一万人が協力し大変話題になった。

帰りに麓の「月の輪郷土資料館」へ新谷さんと入館し、住民協力の状況、出土した木棺や埴輪類、多くの鏃など見学した。

ここでも説明を頂き、本来の目的が充分叶えられた一日であった。

月ノ輪古墳は、五世紀前半の円墳。県指定史跡。

※粘土槨：丸太を刳り抜いた棺の周りに粘土を詰めた埋葬施設。

現場に立つ

一九八八（昭和六三）年三月のある日、「出ましたよ！」という電話で、現地へ飛んで行った。

発掘調査担当の平井勝さんが足元の物体を目配せして知らせている。そこには、割った竹に包まれた大刀がカズラでぐるぐる巻きになっていた。読売新聞の記者が「これは何ですか？」と執拗に問いかけていた。

「現地説明会までは、公表されないんです。」平井さんが私にささやいた。

大谷一号墳出土の「双龍環頭大刀」である。現場での作業が終わって、平井さんと牧原医院へ向かった。電話をしていたので、牧原医師が出迎えてくれ、「ゆっくり調べて下さい。」とレントゲンのスイッチを入れた。

二人は、無言で大刀にレンズを滑らせた。「何も見えないなあ～」刀身は錆びてガタガタで、一カ所が折れていた。文字でもあればとの期待は外れた。

大刀の刀身は鉄、鞘は木、その上に銅板を張り、精緻な文様を打ち出し、金箔を貼っている。鉄や銅は湿気で腐食し易く、木は乾燥すると割れ易い。古墳の奥壁には水が垂れた跡が見られた。玄室内の湿度のバランスが絶妙で、ほぼ完形で出土し注目を浴びた。

その後、レプリカ（模造品）を作るため、平井さんと奈良の元興寺文化財研究所へ向かった。車の後部座席で、平井さんが大刀の入った箱をしっかり抱えていた。

あれから三〇年、平井勝さんが逝って一八年の歳月が夢の間に流れた。

来る年が平穏で
明るい年で　ありますように。
来年も何卒よろしくお願い申し上げます。
会員一同